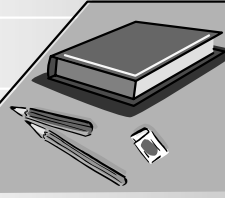


# 学生時代と図書館 64

— アメリカ国立公文書館と「自由」 —

國安 俊彦



学生時代における図書館の思い出は数多くあるが、やはり忘れられないのはワシントンD.C.にあるアメリカ国立公文書館（The U.S. National Archives and Record Administration）についてであろう。アメリカ外交史、とりわけ1940年代におけるローズヴェルト、トルーマン大統領の対ソ、対中政策を専門とする私にとって、一次史料を集め、読み込むことがなにより不可欠であった。幸いなことに私の母校は研究活動については、実に寛容であった。そのため休暇期間のみならず、授業期間中であってもアメリカに行くことを許可してくれ、じっくりと史料集めに専念することができたのである。

史料収集を目的として初めてワシントンD.C.を訪れたのが1992年の夏、ビル・クリントンが民主党の大統領候補者として確定した頃であった。ワシントンの夏はとても蒸し暑く、私は毎日汗だくになりながら、連邦議会議事堂を前にしてペンシルバニア通りを進み、アメリカ国立公文書館に通い詰めた。

国立公文書館は、観光客にとっては「独立宣言」を見学できる場所として有名であるが、本来の役割は連邦政府に関するすべての公文書を保管することである。その中から機密解除となった公文書が一般公開されるのであるが、その数は当然膨大なものとなる。それらは組織、時系列等に従って整理され小さな箱に区分して保管されるのであるが、どの箱に何の書類が収納されているのか詳細にはわからない。したがって私は毎日毎日数十にも及ぶ箱を開け、膨大な書類を斜め読みしつつ、お目当ての史料を探し続けなければならなかった。とにかく手間がかかった。数字がたくさん記載してある書類が見つかり重要なものかと精読したものの、結局単なる出張明細書であることが分かり、落胆したことも数知れない。しかしながらそうした過程でトルーマンやマーシャル国務長官直筆によるメモ、数々の修正の跡が残るヤルタ条約の草案など、当時の政策立案者の想いがストレートに伝わる史料に出会うことができた。その興奮は今でも忘れられない。また公文書館のスタッフは皆エキスパートであり、彼らから多くのヒントを得て史料を探し出すことができた。彼らの献身的な働きに対して感謝の念で一杯である。

国立公文書館について特に感心したのが、その「開放性」に関してであった。外国人である私でさえも、IDを提示すれば（それもパスポートではなく、ユースホステル協会の国際学生証でよかった）、すぐに利用が可能となり、本を借りることさえできた。その開放性、利便性については、日本の国会図書館などと比較にならないであろう。このことは「自由の国」であるアメリカの本質に触れた気がした。これこそがアメリカの魅力、ソフトパワーなのだなと思った。

9・11以降、アメリカは変わってしまった。テロから身を守るため監視を強めることは仕方がないかもしれない。しかしながらアメリカの「強さ」の象徴であった自由が失われることは、アメリカのみならず、国際社会全体にとって大きな損失である。アメリカが開かれた社会を保持し、私が公文書館で味わった大いなる感動をいつまでも日本の学生達に与え続けてほしいものである。

くにやす としひこ（准教授・国際政治学・アメリカ外交史）